

深い学びをデザインする授業づくり ～主体性を発揮させることを通して～（１年次）

I 主題設定の理由

学校教育、とりわけ義務教育では、一斉一律、みんなで同じことを、同じようにする授業が多く行われ、ピーター・グレイはそれを「強制的な教育」¹⁾と表現し、「当事者には選択がない」と述べている。実際、授業では教師が課題を与え、与えられた課題を作業のように解決する生徒も見受けられることを考えると、義務教育というものが生徒にとっては受動的なものであると捉えることもできてしまい、主体性を発揮して取り組む活動ではないとも捉えられる。その要因の一つとして、奈須正裕は「学びの文脈が取れないような課題なり場면을教師が設定していること」²⁾が無気力な生徒を生み出すと述べており、生徒が主体性を発揮して学習に向かうことを教師が授業の中で支援する必要がある。

主体性を発揮して学習に向かう生徒の姿を考えたとき、白井俊は、主体性について「実は『主体的』や『主体性』の捉え方は曖昧であることも多い。（中略）『主体的』や『主体性』が本来目指すところが、単に教師の指示どおりに行動することではないとしても、反対に、生徒による自発的な行動であれば何でも良いというものでもない」³⁾と述べている。さらに、白井は、OECDのラーニングコンパス・コンセプトノートで「働きかけられるというよりも自らが働きかけることであり、型にはめ込まれるというよりも自ら型を作ることであり、また他人の判断や選択に左右されるというよりも責任を持った判断や選択を行うこと」⁴⁾と説明されているエージェンシー^{注1)}と主体性の関係も示唆している。学習において、単に生徒が興味の湧く課題を教師が提示するというものではなく、一人一人の生徒が自ら学びの機会を設定できる場면을教師が設定し、文脈に沿った深い学びをさせることが求められる。

また、令和３年１月に中教審答申で「令和の日本型学校教育」の構築が目指され、その中で、「目の前の事象から解決すべき課題を見だし、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出すことなど」⁵⁾が目指す資質・能力として示されており、現行の学習指導要領で育成を目指す「主体的・対話的で深い学び」と深くかかわる内容でもある。

そこで本校では、深い学びを達成するためには主体性を発揮させることが必要だと考え、主体性を発揮させるために、課題や問題^{注2)}の解決方法を自ら考え選択したり、時には課題や問題などを自ら見出したり、追究したりしていく場面を設定することとし、研究を進めていく。その際、主体性を発揮し、自らの学びをコントロールして思考する基となる知識を獲得させるために、３年間を見通した単元構想が必要となるのは言うまでもない。

しかし、生徒が主体性を発揮すれば、必ずしも深い学びを達成するとは限らない。そのため、主体性を発揮した生徒が、各教科の目指す深い学びを達成できるよう、教師の手立てによって学びの文脈^{注3)}をつくる必要があると考える。生徒は、主体性を発揮しながら学びの文脈において、知識を構造化するための対話^{注4)}や学習した知識の意味付け、価値付けをする活動を通して精緻化されていく学びを深い学びと考え、デザインしていく必要がある。このとき、主体性を発揮させるために、課題や問題の解決方法を自ら考え選択

したり、時には課題や問題などを自ら見出したり、追究したりしていく場面を設定することで、中教審答申で掲げられた「個別最適な学び」が生まれ、生徒が主体性を発揮して学ぶ中で生じる対話などの活動において「協働的な学び」が行われると考える。

そこで、各教科において、主体性を発揮する具体的な手立てを考え、深い学びをどのように達成させていくのかを本研究のねらいとし、研究主題を「深い学びをデザインする授業づくり～主体性を発揮させることを通して～」として、研究に取り組むこととした。

Ⅱ 研究の概要

1 研究主題を実現させるための各教科の取り組み

主題設定の理由を踏まえ、各教科において、求められる教科教育の在り方や目の前の生徒たちの姿などを踏まえて、次のものを定義する。

- 各教科における3年間を見通した深い学びと目指す生徒像
- 各教科における主体性を発揮した姿とそれを発揮させるための手立て

以上のことを各教科で定義していく。その際、「各単元における深い学び」についてはもちろんのこと、「個別最適な学び」「協働的な学び」についても、指導案や単元計画の中で、どのように表れてくるのか示すこととする。「個別最適な学び」については、個の何に依じて最適化していくのか、「協働的な学び」については、何の目的のために協働するのかを明確にする。

さらに、手立てによる生徒の変容を、育みたい資質・能力がどの程度育まれたのかを検証するための方法によって見取っていく。これによって、育みたい資質・能力がどの程度育まれたのか、資質・能力を育むための手立てが有効であったかを明らかにし、手立ての改善に努めていく。なお、生徒の変容を見取っていくに当たり、全体傾向を捉えつつ、その補助的資料として、抽出生徒を設定する。

2 研究計画

(1) 本研究シリーズの計画

本研究は、以下のような計画で研究に取り組んでいる。

1 年次	・ 理論（総論、各教科の教科理論）の構築とその提案
2 年次	・ 理論（総論、各教科の教科理論）の確立とその提案 ・ 研究紀要の作成
最終年次	・ 各教科の研究のまとめ ・ カリキュラムの作成

(2) 1 年次のねらい

本シリーズの開始にあたって、各教科の教科理論の構築をねらいとする。まず、各教科における3年間を見通した深い学びと目指す生徒像を設定する。また、各教科において、生徒が主体性を発揮した姿とそれを発揮させるための手立てを定義する。そしてそれらの提案の検証をしていく。さらに、指導案や単元計画の中に、各単元における深い学びが3年間を見通した深い学びとどのようにつながるのかと、「個別最適な学び」「協働的な学び」を提示する。

- 注1) エージェンシーは、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」（OECD、2019）として定義されている。
- 注2) 本校でいう課題とは、学習において、教師が生徒に与えるきっかけとなるものを示している。また、本校でいう問題とは、課題に取り組む上で困難に直面することを示す。問題は個人のものに限定されず、グループや集団のものも含まれる場合がある。
- 注3) 本校では「単元で身に付けさせたい知識・技能に対して思考できる枠組み」と考える。
- 注4) 本校でいう対話とは、他者だけにとどまらず、ものやこと、自己などとの認知的な相互作用を示している。

引用文献

- 1) ヒーター・グレイ『遊びが学びに欠かせないわけ』築地書房、2018年、90ページ
- 2) 奈須正裕『ポスト・コロナショックの授業づくり』東洋館出版、2020年、75ページ
- 3) 白井俊『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来』ミネルヴァ書房、2020年、86ページ
- 4) OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese、OECD、2019年、3ページ
- 5) 中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』文部科学省、2021年、4ページ

参考文献

- 奈須正裕『次代の学びを創る知恵とワザ』ぎょうせい、2020年
- 諏訪正樹『知のデザイン 自分ごととして考えよう』近代科学社、2015年
- 田村学『問い、対話、振り返りによる 中学校の授業改革』小学館、2020年
- 田村学『学習評価』東洋館出版社、2021年